

清純派令嬢として転生したけれど、
好きに生きると決めました

登場人物紹介

アーネット (イメチェン前)

本来のゲームヒロインの姿であり、
清楚で大人しい令嬢。
ゲーム内では選択次第で
様々な可能性があったのだけれど……

アーネット (イメチェン後)

中身は、ある日突然ゲームヒロインに
なってしまった元日本人のあかり。
ライザックのウザい求愛や
周りのプレッシャーにうんざりした結果、
なりたいた自分に大変身を遂げた。

タナトス

教会の神父を務める青年。
貴族の庶子であり、
このままの暮らしを続けるべきか
悩んでいる。

ヒューゴ

アレイスの側近である有能な青年。
主とは気心知れており、
彼の溺愛癖もよく知っているため
アーネットに同情的。

クリスティーナ

ライザックの婚約者である令嬢。
一見、意地悪そうな美女だが
実際は曲がったことが嫌いなお姉様。

アレイス

大国であるルネストンの王子様。
物怖じせず自らの道を進む
アーネットを気に入りに
こやかに見守ってくれている。

ライザック

ナイール国の王子。
センス最悪で、思い込んだら
一直線のナルシスト。

シャロン

ルネストン国のわがまま令嬢。
アレイスに好意があるように
振る舞っているのだが……?

大理石の床はシャンデリアの輝きを反射して、まばゆい光を放っている。その眩しさに顔をしかめ、私はゆっくりと周囲を見回した。

ここはどこだろう……

自分が誰で、なにをしていたのかもわからない。覚醒したばかりの頭は霧がかかったみたいになんやりとしている。白大理石を基調にした壁に金の蔓が這う空間——どこかの広間に人が集まり、ざわめいていた。

皆、遠巻きにこちらの様子をうかがうか、ひそひそとささやき合うだけで、誰も近寄ってこない。広間の中央にある螺旋階段の端に立つ私の正面にあるのは、広い男性の背中。

まるで私を庇うように立つ人物の背中を、不思議な気持ちでじっと見つめていた。

「君はなにをしたのか、わかっているのか」

男性の厳しい声が響くと、辺りはシーンと静まり返る。緊迫した声を聞き、私は肩をびくりと揺らした。

なにが起こっているのかわからず、息を呑み、瞬きを繰り返す。

そつと横にずれて、視線を前方に向けると、そこにいたのは美しい女性。
長い金の髪を綺麗に巻き、真っ赤なドレスを身に着けた女性はとても麗しく、そして勝気そうに見えた。

彼女は唇をキュッと噛みしめると、一度うつむいた。
だが、すぐさま顔を上げ、キッと鋭い視線を男性に向け、口を開く。

「お言葉ですがライザック様。私は今、アーネット様とお話をしているのです。誰も食ってかかろうなどと思っていません。まずは落ち着いてください」

女性の声は淡々としていて、感情を押し殺している風にも聞こえた。一方、男性はいらだつた声で答える。

「落ち着いてなどいられるものか!! 君がした嫌がらせの数々、今まで我慢していたが、もう限界だ!!」

急にこちらを振り返った男性の顔は、怒りで歪んでいた。

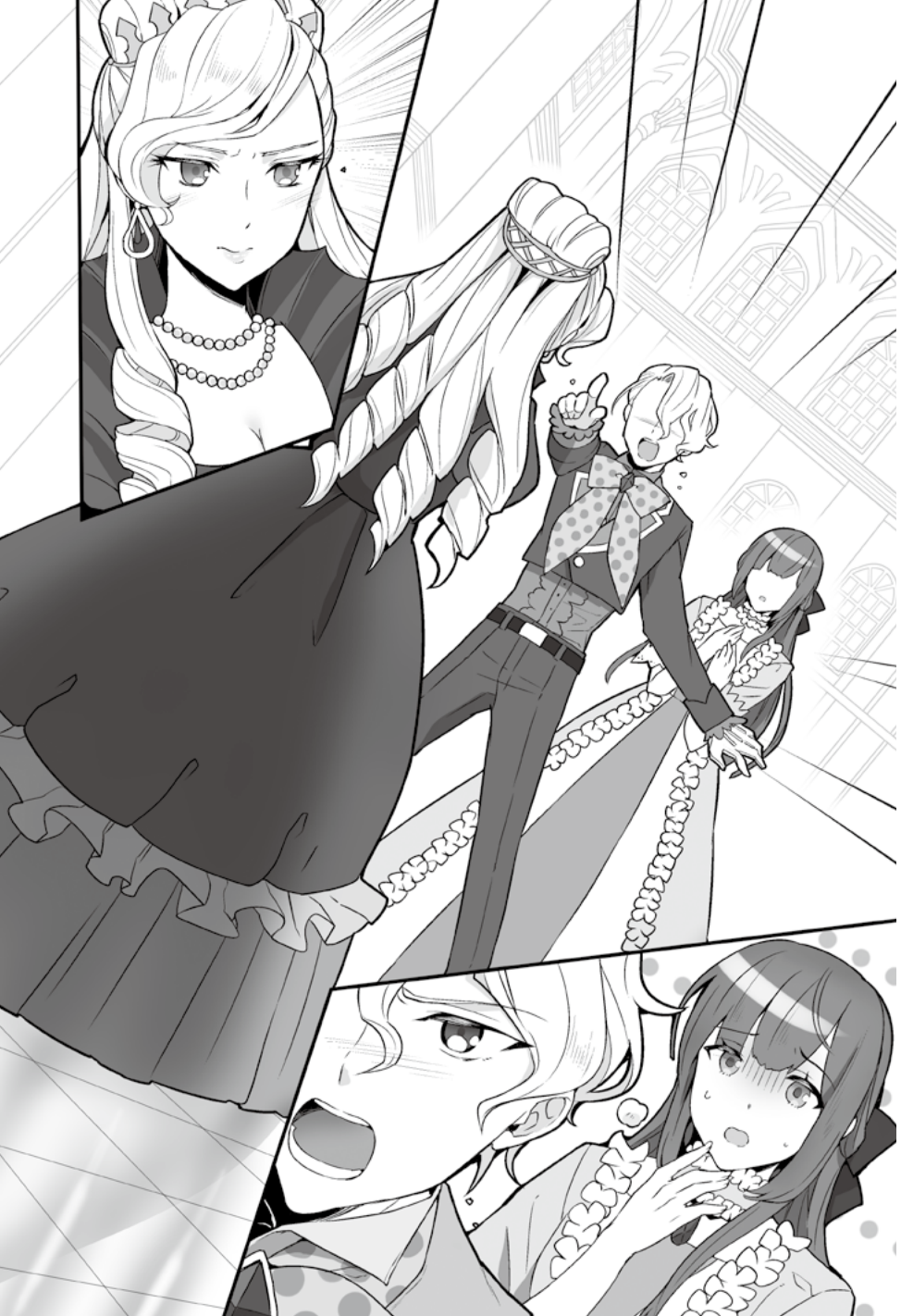
「ほら、アーネットがこんなに脅えているではないか!!」

男性の声の大きさに驚き、私はよろめく。そしてそのまま、フワッと宙に浮いたような感覚に襲われる。

あ、これ、いつもの貧血……

そう思うと同時に力なく、足から崩れ落ちた。

視界に入っているのは、男性の焦った顔と、その向こうにいる女性の驚いた顔。



後方に倒れ込んだ私はしたたかに後頭部を打ち、意識を手放した――

まどろみの中、小鳥のさえずる音がどこからか聞こえてくる。
もう朝かしら。

面倒だなあ、起きたくないわ。だけどそろそろ起きないと、学校に遅刻しちゃう。
うとうとしていたかったが、そつと瞼を開けた。

視界に入ってきたのは高い天井。白を基調とし、蔓と果実の模様が描かれている。
あれ、私の部屋の壁紙、こんな模様だったかしら。

自分の部屋のはずなのに見覚えがなく、不思議に思い、その場で目を瞬かせた。
ボーッとしたまま顔を横に向けると、ベッドカバーが見える。

その白いレース素材の布にも見覚えがないし、子供の頃から愛用していたキャラクターつきのタオルケットも見当たらない。

ここはどこ!?
自分の部屋じゃないと気づき、目をクワツと見開くと同時に、飛び起きた。

そして、私が寝かされていた部屋の全貌を確かめる。

やけに高級そうで巨大なベッドが置けるだっぴろい部屋。その他にソファと本棚、壁に飾ら

れた絵画にマントルピースの暖炉がある。それら豪華な調度品に囲まれて寝ていたらしい。

「ここは……どこよ」

これは夢なの？

それとも、旅行にきたんだっけ？ でも、私が泊まるホテルにしては高級すぎる。まさかスイートルーム？ だけどそんなお金はないし、そもそも旅行に出た覚えだってない。

それに、不思議とこの部屋に既視感があるのはなぜ？

どこかで見た光景だと思いつながら、キョロキョロと部屋を見回した。シーツをまくり上げ、そろそろとベッドから下りると、ふかふかの絨毯の感触。

足下を見て驚愕した。私が身に着けていたのは、真っ白なネグリジェだったから。

可愛いレース刺繍のデザインで、裾がひらひらしてロマンチックな雰囲気を出している。

まるでお姫様が着るようなネグリジェだけど、私、こんな寝間着は持っていない。

愛用のパジャマはタオルケットと同じ、キャラクターつきだったはず。

私の身になにかが起きている……!!

ふと、アンティーク調のドレッサーがあることに気づいた。繊細なレリーフが施された上品なデザインだ。鏡はびかびかに磨かれている。

ドレッサーを視界に入れた途端、ダッシュで駆け出した。

腰を折り、鏡に姿を映した瞬間、息を呑む。

ブラウンのストレートヘアは、長くて艶がある。そして、ほっそりとしたしなやかな手足に豊満

な胸。白い肌にふつくらとした唇、くつきりとした二重瞼ふたえまの大きな目に、長いまつ毛。鏡に映っている絶世の美少女を見て、私は頬に両手を添えて叫んだ。

「アーネット・フォルカーじゃない!!」

ちよっと、これはどういうことなの。なぜ私がアーネットになっっているのよ、誰か説明して!! 髪を振り乱し混乱する私だが、そんな姿さえ可愛いな、チクショー。なんて、言葉が荒くなってしまふのも、動揺している今は許して欲しい。

状況が把握できず、心臓がバクバクと音を立てる。

冷静になろうと胸に手を当てると、ふくよかな弾力にまたショックを受けた。悔しくなるほどのナイスボディだと実感する。

アーネット・フォルカー。

彼女は私がプレイしていた乙女ゲームの主人公で、十八歳になる、侯爵の一人娘。

以前、私はあるゲームに夢中になっていた。その名も『切り開け乙女の運命』。

このゲームでは、ストーリーが展開していく中でアーネットがさまざまなヒーローと出会う。そして運命の男性と想いを通じ合わせてハッピーエンドになることもあれば、バッドエンドを迎えたり、庶民になって商売を始めたりすることも。隠し要素として王女となり政治に関わるルートもある。

他にも結末はいろいろとあるのだけれど、男などいらんわとばかりに女傑じよけつルートへ進む場合もあり――

ようは恋愛メインにするかしないかは自分次第の、シミュレーションゲームだ。

一部のルートを除き、アーネットのゲームにおける設定は、完全なる清純派だった。物静かでおっとりしていて、控えめで優しい女性。それこそ男性のみならず、女性からも好かれ、絶世の美少女で性格もよしいった嫌味のないキャラ。ゲームをプレイしながら思ったものだ。

『うわー。こんな完璧な女性と友人になりたくないわー』と。

もし友人になつたら、自分なんて完全なる引きたて役だろう。そんな心の狭いことを考える自分が嫌だが、思ってしまうものはしょうがない。

けどなぜ、よりよってアーネット・フォルカーになっっているのだ、私が。

小説とかゲームでよくある展開なら、悪役令嬢に転生するのじゃなくて?

そしてバッドエンドを防ぐため、奔走ほんそうするのでしょうか? そうでしょうか?

私の本名は大沢おおさわあかり。

趣味はゲームと、某女性歌劇団のDVD鑑賞。いたって普通の高校三年生で、受験勉強の息抜きに購入したのが、このゲームだった。

まあ、息抜きというより没頭ぼつとうしてましたよ。いい加減、勉強に本腰を入れないとやばいと気づき、ゲームを封印するまでは。

本当になぜ、こんなことになっっているのだろう。なぜ、私がアーネットになっっているの。

どれだけ考えてみても、原因は思い当たらない。

……うん、これは夢なのかもしれないわ。
そう思い、いそいそとベッドへ戻る。

ふかふかのベッドに身を倒し、再び体を休めた。それから天井の模様をじっと眺めながら考える。
夢、なのよね。もうしばらくしたら起きるはずだわ。

そうして、いつもの日常が始まるはず――

そう自分に言い聞かせて、静かに瞼を閉じる。

その時、扉が控えめにノックされ、人の足音がした。仕方がないので返事をして、そつと上半身を起す。

入室してきたのは一人の女性だった。

侍女の服を身に着け、ひとつにまとめた黒色の髪に、スラッと背の高い彼女は、確かアーネットのお付きの女性のはず。名前は……

「エミリー」

自然と口から出た。

名前を呼ばれた彼女はホッとした顔をしつつ、手にしていた水差しをテーブルに置き、こちらに駆け寄ってきた。

「アーネット様、お加減はいかがでしょう？」

感極まった様子で目が潤んでいる。

「えっ、ええ、大丈夫よ。私はいい……」

そもそも、なぜベッドに寝かされていたのだろうと不思議に思っ、首を傾げた時、後頭部がズキと痛んだので、思わず顔を歪めた。

エミリーは慌てふためき、身を乗り出してくる。

「無理をなさらないください」

そう言っ、てシーツを手に取り、私を寝かしつけようとする。エミリーの強引さに戸惑いつつも、聞いてみた。

「私はどうしたのかしら？　なんだか記憶が曖昧で……」

エミリーは少しの間、説明してくれた。

「足元が悪くてお転びになったそうです。頭を打ったので、どうか安静に願います」

恐る恐る後頭部へ手を当ててみると、確かにポツコリと盛り上がっている。たんこぶに違いない。夢なのに、やけにリアルだわ。

ベッドに横になり、天井を見つめながら、自分がアーネットになっている理由を再び考えた。

しかし、やっぱりちががあかない。あまりにゲームに夢中になっていたの、こんな夢を見ているのかしら？

でもまあ、そうだとしたら、そのうちに覚めるだろう。

目が覚めるまでは、この夢の中の生活を楽しもう。

そう割り切った時、大きな音を立てて扉が開いた。

「アーネット!!」

驚きのあまりビクツと肩を揺らし、上半身を起こす。すると、慌てた様子の男性が息を切らして部屋に入ってきたところだった。

男性は両手を広げ、私に近づいてくる。

「ああ、大丈夫だったかい!? 気が気じゃなかったよ」

いきなり入室し、しかも大きい声を出して、おおげさな仕草で近づいてくる男性は不審極まりない。そもそもノックぐらいいしなさいよ。私の側に立つエミリーも驚いた様子だが、注意せずに一歩後ろに下がり、そっと頭を垂れた。

「アーネット、僕の天使よ。君が倒れた時、心臓がその場で止まってしまいかと思ったよ」

芝居がかった台詞を、まるで息をするかのように口にする男性に、目が点になる。

そこで男性をまじまじと見た。

柔らかな金の髪はややくセがあるが、艶もある。新緑色の瞳はキラキラと輝き、私を見据えていた。中性的な雰囲気を持っていて、目を惹く人だと思う。ただ、胸元を飾るスカートの柄がどうにも気になった。地の色が紫と黄色で、赤い水玉模様がついているのだ。奇抜なデザインのスカートに、顔の美しさが半減して見える。

なぜ、そのスカートなのだろう。眉間に皺を寄せ、ジッと見てしまう。

それに彼が入室してきた途端、ムワツとするほど甘い香水のにおいが部屋中に漂った。甘すぎる香りは苦手だ。

男性はベッド脇で膝を折ると、そっと私の手を取った。

「どうしたんだい、僕をそんなに見つめるなんて」

真っ直ぐに見つめてくる男性を見て、やっと気づいた。

彼はこの国の王子、ライザック・ナイールだ。

確か、彼は――

「ライザック様はクリステイーナ様と……」

そう、彼はアンドラ侯爵家の令嬢、クリステイーナと婚約していたはずだ。それなのになぜ、私の部屋にいるの。

クリステイーナの名を出した瞬間、ライザックはスッと目を細めた。そして手にギュッと力を込め、口を開く。

「アーネット。僕は決めたよ」

「なにをですか?」

私をじっと見つめながら、彼はさも重大な決意かのように続けた。

「僕はクリステイーナと婚約を解消しようと思う」

ライザックは口を真一文字に結び、決定事項だとばかりの顔だ。

えっと、確かクリステイーナとライザックは幼い頃に両家で決めた婚約者同士だった。お互い申し分ない身分だし、良縁じゃない。それをなぜ解消するのだろうか。

そして、どうしてわざわざ私に告げるの?

「まあ……。それは大変ですね」

簡単に婚約破棄するなんて言うけどさー、両家の関係とかもあるじゃない？ なのに一方的に断ったら、随分な醜聞になる。

そもそも、個人の意思でできることじゃないと思う。それこそ、ドロドロの展開が待ち受けてうだわ。

まあ、私のことは巻き込まないでくださいいね。

あとそろそろ、握った手を離してくださいませんか？

ライザックにギュッと握られた手を抜こうとしても、なかなか抜けやしない。笑顔でグッと力を込めると、ライザックの顔に笑みが浮かぶ。

「ああ、アーネット。僕の決意を聞いて、それほどまでの笑顔を見せてくれるなんて、僕は幸せ者だよ」

いや、違うってば。

背筋がぞわぞわとしたため、強く手を引き抜き、やっとなんか解放された。再び捕らわれちゃかなわんと、シーツの下に手を引っ込める。

ライザックはにっこり微笑むと、スッと立ち上がった。

「じゃあ、また来るから。安静にして、僕を待っていて欲しい」

キラキラした目で見つめられているけど、そんなことよりもライザックの胸元のスカートの柄が気になって仕方ない。奇抜な色彩とデザインで、とにかく目に優しくもないのだ。

なにも言えることはないため無言でいる私をどう勘違いしたのか、ライザックは両手を広げ、名

残惜しそうな仕草を見せた。

「ああ、そんな悲しい顔をしないでおくれ。僕まで離れがたくなってしまっ!!」

次から次へと芝居がかった台詞を口にするライザックは、まるで異次元の生物みたいだ。まったく理解できない。沈黙を続ける私に、彼はニコッと微笑んだ後、片目をつぶってみせた。

「じゃあ、僕はいくよ。必ずまた来ると約束しよう」

や、結構です。

喉まで出かかった言葉をグッと呑み込んだ私。ライザックはこちらの心中など知らずに、笑顔のまま退室した。扉がバタンと閉まった音を聞き、やっとなんか落ちてく。

な、なんなの、あの人……

えっと、ライザックはこの国の麗しい王子様……だと思っていた。少なくともゲームの画面越しに見る彼は。ゲームの中では普通にイケメンだったのに、実際に目にした彼は服装のセンスが最悪だ。それに内面も、かなりイタイ。もしやこのゲーム、バグったか。

ゲームの中では、ライザックとの未来を選ぶことも、拒否することも自由だった。

私は、ゲームの彼も強引さが鼻について、あまり好きなタイプではなかった。それでいつも華麗にスルーする方針を取っていたが、なにせライザックはぐいぐいと積極的にくるし、大人しい性格のアーネットは、はつきりと拒否できないことが多かったのだ。そもそも強気に出られるキャラじゃないしなあ、アーネットは。だが夢の中とはいえ、アーネットの立場になってみて確信する。

ライザックはない。あり得ない。

ここはプレーヤーとして、彼の好意をスルーしたい。
さきほどの様子を見るに、ライザックはゲームと同様に私、アーネットのことが好きなのだろう。……うん、認めたくないけど、好意をビシバシ感じた。
部屋の隅に控えていたエミリーが、水差しをベッド脇へ運んできた。なので思い切って聞いてみる。

「ライザック様は、いつもあんななの？」

エミリーは言葉に詰まったのち、首を傾げた。

「あんな、とはどのような意味でしょうか？」

うまいな、エミリー。質問に質問で返し、とぼけている。まあ、エミリーの立場で下手にライザックのことを語れまい。それこそ間違つて本人の耳に入れば、不敬罪に問われかねないのだから。これ以上、エミリーを追及するのはやめよう。そう思い、ベッドに横になる。

「……ちよつと、疲れたわ」

眩くと、エミリーがそつとシートを肩にかけてくれた。

「少しお休みになってください。アーネット様は転倒なさったのですから」

「わかつたわ」

どこで転倒したのかも、記憶が曖昧だ。

ただ、今はすぐ疲れていて思い返す気力もない。私は高い天井を見つめながら、静かに瞼を閉じたのだった。

『切り開け乙女の運命』の舞台となるナイール国は、これといった資源や特産品のない、小さな国だ。

悲惨なくらいに貧乏というわけではないが、決して豊かではない、海に囲まれたこぢんまりとした国。海を隔てた隣のルネストーン国などは、比べものにならない小国である。

『資源もナイ、特産品もナイ、なんにもナイ、ナイール国』——そんな自虐的な歌を自国の子供たちが歌うほどの国。自然だけはたっぷりとあるけどね。

そんな国で、主人公は自分自身の生き方を切り開いていく。

恋愛に走るもよし、商売に走るもよし、政治に走るもよし。

乙女ゲーではあるけど、人生のシミュレーションという要素が強かつたつけ。

私はというと、恋愛に走るつもりが、なぜか農民になって広大な畑を耕すエンドや、はたまた海を駆け巡る女海賊エンドを迎えたなあ。

改めて考えると、なんでもありだな、オイ。

そして、なぜか今見てるこの夢のアーネットはライザック王子と急接近しているらしい。ってことは恋愛ルートなのかしら？ だとしても相手に不満あり、おおありだ。

まあ、なんにせよ、目が覚めたら現実に戻るはず。

そう、これは夢なのだから——

小鳥のさえずりが窓の外から聞こえる。

カーテンが引かれる音がして、日差しが部屋に入り込み、まぶしさにピクピクと瞼が動く。

「おはようございます、気持ちのいい朝ですよ」

私を起こす声にゆつくり目を開けると、視界に入ってきたのは高い天井。そしてエミリーの姿。なんて長い夢なのだろうか。

ぼんやりと思いながら、上半身を起こした。

「体調はいかがですか？」

気遣うような視線と共に尋ねてくるエミリーに答える。

「ああ、うん。体調は大丈夫よ、体調は」

だが、頭の方がどうもおかしい。だって、なかなか夢から覚めないのだから。

あくびをしつつ背伸びをした。するとエミリーが驚いた顔をしてこちらを見つめる。

「どうしたの？」

首を傾げて聞いた私に、エミリーがハツとして答えた。

「いえ、長年アーネット様にお仕えていますがあくびをなさっているのを初めて見ました」
変なところで感心するものだと、逆に感心してしまった。

私だって人間だ。あくびもするし、伸びもする。人間だもの。

そこで、ハツと気づく。

この夢の世界では、私は大沢あかりじゃない。アーネット・フォルカーなのだ。

確かに見目麗しい侯爵令嬢のアーネットは、人前であくびなどしないのかも。

でもさ、いくらエミリーがいるとはいえ、自室だよ？ 自分の部屋ですら気を抜けないなんて、

そんなの嫌だわ、私。

この夢が覚めるまでは、ほどほどに好きにさせてもらおう。だって窮屈じゃない。

ベッドから下りると、クローゼットの前に立ち、エミリーに声をかけた。

「着替えるから、手伝って欲しいの」

一人で着替えたいところだが、ドレスの着方がわからない。

エミリーは笑顔でうなずき、クローゼットの扉を開いた。ぎっしり並んだドレスを見て、私は驚きのあまり口を大きく開けてしまう。さすが侯爵令嬢だけあって、衣装持ちだわ。

「本日はどのお召し物にいたしますしょう？」

エミリーが何着か手にすすめてくる。

クローゼットの中にあるドレスは白や若草色など、優しい色合いのものが多かった。

「えっと、そうね……」

迷っているとエミリーがおしとやかな雰囲気ドレスを差し出してくる。

「春の日差しをイメージさせるこちらのドレスはいかがでしょう？ 今日空と同じ色合いですわ」

エミリーがはりきった様子ですすめてくるので、うなずいた。

「そうね、願いますわ」

ネグリジェを脱ぎ、コルセットをつけ、ウエストをこれでもかと絞られる。気絶するんじゃないかと思うぐらい苦しい。

そしてやっとドレスを着用する。鏡台の前に腰かけるように促され、腰を落ち着けると、今度はパウダーをはたかれ、薄く化粧を施された。鏡の中の自分を見て思う。

つ、疲れるわ、これ。着替えて化粧をするだけで、もうぐったりだ。ロールプレイングゲームならHPをぎりぎりまで削られているに違いない。これを毎日となると大変よね。美しくあるという事は簡単なことではないのだと実感した。

最後に私の唇へ薄桃色の紅をひき、エミリーが鏡越しにニコッと微笑んだ。

「はい、出来上がりです。今日も美しいですわ、アーネット様」

鏡に映る私は、やっぱりアーネット・フォルカーだった。

ゲーム画面で見た彼女が、ここにいる。

自分の姿だというのに見とれてしまっていると、エミリーが声をかけてきた。

「さあ、下へ参りましょう。朝食の準備ができていますわ」

朝食と聞き、胸が躍った。実はお腹が空いていたのだ。夢だけとお腹が空くななんて変な感じ。だが空腹には抗えない。

「ええ、行きましょう」

そして朝食の席へ、いそいそと向かったのだった。

広間の扉を開けると、先に椅子に腰かけている人たちがいた。

渋みのあるロマンズグレーの男性と、物静かな印象を受けるほっそりとした女性。

アーネットの両親だ。

二人はどちらもアーネットによく似ている。

なんだか緊張しながら案内された席に腰かけると、父が声をかけてきた。

「おはよう、アーネット。体は大丈夫なのかい？」

「おはようございます。ええ、一晩休みましたら回復しましたわ」

頭を垂れると父はゆつくりとうなずいた。母とも、挨拶を交わす。

それを皮切りに、朝食が運ばれてきた。

豆のポタージュに新鮮そうな野菜のサラダ。上にのったクルトンが、とても美味しそうだ。

「では、いただきます」

早速スプーンを手にして、ポタージュを口にした。

「美味しいっ!! なにこれ。舌の上でとろけるような、まるやかな味!」

一口飲んで、感激した私はべろりと平らげた後、フォークを手に取る。サラダはみずみずしく、食感がシャキシャキだった。クルトンもカリッとして、好きな感触だ。酸味の効いたドレッシングも美味しさを引き立てている。

夢中になって食べていると、ふと視線を感じた。

顔を上げたところ両親が手を止めて口を小さく開け、じっと私を見ている。
あ、しまった。

今の私はアーネットだった。生粋のお嬢様は、朝食でこんなにがつつかないはずだ。

「と、とても美味しいですわ」

引きつった顔で、おほほとお上品に笑うも、両親は驚いたように目を丸くしたままだった。

いけない、意識しておしとやかに食べなくては。

父はコホンと咳払いを一つすると、真っ直ぐに私を見つめた。

「アーネット、近々、ルネストン国から大事なお客様がいらつしやる」

「ルネストン国から？」

思わず聞き返す。ルネストン国は隣国で、近隣で一番の大国だ。それこそ、資源や財力など、ナイール国とは比べものにならないほどの。

ナイール国はルネストン国には絶対逆らえないし、機嫌を損ねでもしたら大変ということが、ゲーム中でも説明されていた。

「ルネストン国の魅力は豊富な資源だ。なんとか我が国にも輸出してもらえないものかと、おうかがいを立ててはいるが、なかなか色よい返事がもらえない。しかし、近くルネストン国が使者を派遣し、我が国が取引に値する国か、見定めにくるらしい」

確かにナイール国など、ルネストン国から見れば、とるに足らない小国だ。取引するにしても、ルネストン国にさして得はない。

でも、それがアーネットにどう関係するのだろうか？

そう思っていると、すぐに謎が解けた。

「そこで我が国としても最大限のもてなしが必要だ。アーネット、お前も手伝ってくれ」

「私ですか？」

驚いてフオークを落としそうになった。そこまでの重要人物を相手になをすればいいのかわからない。困惑する私に、父は説明を続けた。

「もてなしの食事会が開催されるから、出席して欲しい」

なんだ、そんなことか。

大国の使者というからには、きっと偉そうな肩書のおじいちゃんみたいな人なんだろうな。

「資源もナイ、特産品もナイ、なんにもナイ、ナイール国と近隣諸国はおるか、子供からも擲擲される我が国では、この話を決めるのは難しいかもしれない。だが、どうにかして取引を結びたいと考えている」

高位貴族である父すら認めているじゃないか。この国はナイナイ尽くしの国だって。

けれど、使者から見て孫娘ぐらいの美少女が接待をすれば、交渉がスムーズに進むと思っているのかな。

それともあれかしら。今回は『隣国の使者の養女になって幸せになる』ルートだったりするのかしら。でも、そんなシナリオ、あったかな？ 隣国の使者なんて言葉も、ゲーム内で見た覚えがない。だけど、これも夢だからかもしれない。

「わかりました、お任せください」

不思議に感じながらも、そう深く考えずに返事をした。

まあ、いいか。食事会の前には夢から覚めているだろう。

そして再び朝食へと意識を向け、綺麗に平らげた後は、自室へ引き上げた。

午後になると、エミリーが一枚の封書を持ってきた。

差出人はクリステイナ・アンドラ。

封書に書かれた名前を見て、目を見開いた。

なんと、あのクリステイナからの手紙だ。アーネットとは真逆の容姿と性格を持つ、誇り高い貴族令嬢。ゲームをプレイしていた時、画面越しに幾度か絡んだから、よく知っている。

アーネットが可憐にひっそりと咲く白い花だとしたら、クリステイナは豪華な真紅の薔薇のイメージだ。

二人はゲームの中ではライバル関係にあった。

そんな決して仲がいいとは言えない関係だけど、なにか用事かしら？

慌てて確認すると、一枚の便箋に丁寧な文字が連なっていた。

『アーネット・フォルカー様』

明日、我が屋敷の庭園でお茶会を開催いたします。

そこでぜひ、アーネット様にもお越しいただきたく思います。

急なお誘いになってしまい、申し訳ありません。

先日的一件でお話ししたいことがありますので、ご出席してくださいと嬉しいです。

クリステイナ・アンドラ』

手紙を読み返してしまう。

これは、なにかのイベント発生の前触れでは……

ライバルのクリステイナに呼び出されたアーネット。これで、なにも起こらないわけがないわ。

もしかして、皆の前でいじめられて、泣かされたりとかする？

それで素敵な男性が現れ、助けてくれて、恋愛フラグが立つとか？

よっしゃあああ、きたコレ！

手紙の差出人がクリステイナと知っているエミリーは、なにかを心配しているらしく、そわそわしている。

「明日のお茶会のお誘いだったわ。なにを着ていこうかしら？」

すっかり行く気になって発言すると、エミリーが大層驚いた顔をした。

「出席なさるのですか？」

もちろん、出席でしょう!! なにが起こるか、この目で見て体験したい。意気込んでエミリーに出席の意思を告げる。

「大丈夫ですか？」

エミリーは気遣うような視線を送ってきた。

「なぜ、そんなに心配そうなの？」

疑問に思っただけ聞いてみると、最初は言いにくそうだったエミリーが、おずおずと口を開く。

「いえ、クリステイナ様は気が強く、言いたいことをはっきりおっしゃる性格だとお聞きします。加えて取り巻きの方も大勢いますし、意地悪をされたりしないかと心配なんです」

エミリーの心配はよくわかるが、心配はいらない。

だって、どうせこれは夢なのだから。それにクリステイナと接触したらどんなイベントが発生するのか、純粋に興味がある。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ」

にっこりと微笑んで告げた。

ああ、どうせなら、お茶会イベントの後に目を覚ましたいかも。

明日なにが起こるのか、私はわくわくした気持ちで一日を過ごした。

そしてお茶会当日、私は朝からドレスに身を包む。

シンプルな若草色のドレスは、首元までしまったデザイン。袖口にあしらわれた白いレースが可

憐さを表している。

髪はサイドだけ三つ編みをして、後ろでリボンを使ってまとめた。

鏡に映る私はすごく儂げで、可愛い。

守ってやりたいと、男の庇護欲をかき立てる外見だろう。

いや、本当、こんだけ可愛ければね。実際、なにを着ても似合ってしまうし。こんな自画自賛も夢が覚めるまでだから許して欲しい。

それにしても、今着用している清纯派なドレスも素敵だけど、目が覚めるような原色のドレスも着てみたい。その時は髪型も縦巻きロールにしちゃったりして。化粧だって濃くしても似合うに違いない、この顔立ちだもの。もつといるようなドレスを着てみたいわ。

でも、アーネット・フォルカーは清楚なお嬢様キャラだから、そんな派手な格好をしてはいけない。ゲームのシナリオが崩壊してしまう。いつも清楚で可憐なお嬢様でいなくてほね。

準備ができた私は馬車に乗り込み、クリステイナに誘われたお茶会に向かった。

クリステイナの家であるアンドラ家に到着すると、初老の執事が出迎えてくれた。そしてすぐに庭園へ通される。

丁寧に刈られた芝の香りと、花の香りが鼻腔をくすぐる。

案内され庭園を進むと、女性の笑い声が響いてきた。どうやらもう、お茶会は始まっているみたいだ。近づくにつれ、徐々に声が大きくなってくる。

やがて薔薇の垣根の向こうに、白い椅子とテーブルに女性が数名集まり、紅茶を囲んでいるのが見えた。

私が一歩近づくと向こうでも気配を感じたらしく、女性たちがこちらを見た。一人の女性がアツ、といった様子で口を開き、なんだか決まり悪そうに視線を逸らす。

だが、真ん中で椅子に腰かけていた女性、クリスティーナだけは表情を崩さずに、真っ直ぐに私を見つめていた。

今日も長い金髪は綺麗に巻かれて、ゴージャスに見える。

やや吊り目だけパツチリとした二重瞼に、アクアマリンのような水色の瞳。

高い鼻筋、ポテツとした厚めの唇には赤い口紅が引かれている。

ドレスも目の覚めるような赤で、胸元にはラインストーンのビーズが輝き、胸の膨らみを強調していた。全身が豪華でセクシーな装いだ。

なんというか、彼女の派手な顔立ちによく似合っている。露出は激しいけれど決して下品ではなく、品がある。そう、まるで女王様だ。思わず足元にひれ伏したくなってしまふほどの威圧感がある。そっちの趣味がある男性にはたまらないだろう。

だけど、いいわよね、派手なドレスが似合うのは彼女だからこそだわ。

まじまじと観察しながら足を進める私に、クリスティーナが声をかけてきた。

「ごきげんよう、アーネット様。お茶会にお越しいただき、とても嬉しく思いますわ」

そこで私にもこやかに笑みを浮かべて答える。

「こちらこそお招きありがとうございます、クリスティーナ様」

クリスティーナはスツと立ち上がると、自分の真正面の空いている席に手を向けた。

「どうぞおかけになって」

「ええ、ありがとうございます」

礼を言いつつ椅子に腰かけた。

お茶会の雰囲気は和やかとは言いがたくなり、話し声もピタッとやんでいる。あ、このアウェイ感。もしかして来てはダメなやつだったかしら？

そう思うものの、ここは夢の中。好きなように行動させてもらうわ。

私が席につくと同時に、側に控えていた侍女が紅茶の準備を始めた。周囲にフワッと漂う紅茶の香りに、一瞬だけ心が和んだ。

皆それぞれ、カップに口をつけるものの、無言だ。気まづくなった私は、なにか話題をふらなくとはと、自分なりに気を遣って口を開いた。

「素敵な庭園ですね。いつもお茶会を開催していらっしやるのですか？」

するとクリスティーナは少しだけ笑みを浮かべ、ゆっくりとうなずいた。

「ええ、そうね。薔薇が見事に咲いているこの時期は、こうやって太陽の光と風を感じながら、紅茶とおしゃべりを楽しんでますの」

「まあ、素敵な催しですね」

運ばれてきた紅茶のカップを手にしつつ、にこやかに微笑む。すると隣のテーブルに座っていた

令嬢が声を発した。

「でもまさか、アーネット様がいらつしやるとは思わなかったですわ」

嫌味な言い方がひつかり、視線を向ける。令嬢はサツと目を逸らすと、なにごともなかったように紅茶のカップを口に運んだ。

歓迎されていない雰囲気を感じている中、もう一人の令嬢がさらにたたみかけてきた。

「本当、どういったおつもりで顔を出されたのかと、感心してしまいますわ。ねえ、皆さん」

同意を求めて周囲の人間をグルッと見回した令嬢は、微笑んではいるが目が笑っていない。

アーネットは彼女たちに好かれていないらしい。

覚悟はしていたが、こんなに敵意をむき出しにされるなんて、想像以上だわ。

「私、用事を思い出したので失礼しますわ」

こりゃ、いったん退散するしかなさそうだ。相手がクリステイナ一人だと思ったから来てみたものの、取り巻きたちが大勢いる中では、居心地が悪いことこの上ない。

敵陣に一人でのこのこ乗り込んだようなものではないか。

スツと立ち上がった時、凜とした声が響いた。

「アーネット様、どうぞお座りになって」

声の主はそれまで傍観していたクリステイナだった。私をじつと見つめる瞳からは強い意思を感じる。

その空気に気圧された私は、再び椅子へ腰を下ろした。

次に彼女は、さきほど私に嫌味をぶつけた令嬢へと視線を投げる。

「私がお呼びしたのよ、彼女を」

その声には有無を言わさない雰囲気があった。

クリステイナは一瞬うつむき、小さく息を吐き出すと、顔を上げ、真つ直ぐに私を見つめてくる。

「アーネット様、お話がありますの。少し二人で散歩しませんこと？」

断ることのできない迫力を感じ、ただうなずいた。するとクリステイナは椅子から立ち上がり、庭園の奥を指さす。

「あちらに見事な薔薇のアーチが組まれているの。そちらを觀賞しにいきましょう」

「ええ」

返事をすると同時に立ち上がった。そして先を歩くクリステイナの背中を追いかける。

無言で足を進めるクリステイナの後ろを歩いていると、薔薇の香りが強くなってきた。目的の場所まであと少しだろうと思っていたら、急にクリステイナが足を止め、振り返った。

こうやって並ぶと女性にしては背が高いことがわかる。スラリとした手足と小さな顔は、モデルみいだ。迫力満点で魅力的な美女だし、男女問わずもてるだろう。

背の低い私は、どうしても見上げることになってしまう。そうしてクリステイナを見つめていると、彼女は唇を真一文字にギュッと結んだ後、言葉を紡ぎ始めた。

「今日、あなたをお呼びしたのは、先日の件でお話をしたかったのです」

本題きたー!!

彼女の顔や声から並々ならぬ決意を感じとり、静かに耳を傾ける。手をギュッと握りしめた。まさか『ライザック様に近づかないで』と、激しく糾弾されるのだろうか。

それとも『生意気なのよ、ライザック様は私のものよ』と、頬の一発でもぶたれるのだろうか。そしたら黙って受け止めるべき？ それともお返しとばかりに一発、いや三倍返すする？

さまざまな想像が脳裏を駆けめぐる。緊張で心臓がばくばくしてきた。

するとクリステイナは、伏し目がちになって口を開いた。

「故意ではなかったとはいええ、あなたにケガをさせてしまったことを謝罪しなければならぬと思っていました」

へ？ 今、なんとおっしゃいました？

わずかに唇を震わせている彼女を見て、驚きのあまり口を大きく開いた。

先日的一件とは、私が貧血を起こして倒れ、頭を打ったことを言っているのだろう。けれど、あれは別に彼女のせいではないし、言うなればアーネットが鈍くさかったただけだ。

彼女が責任を感じる必要はないのに、目の前の彼女は苦しんでいるように見えた。

なんということだろうか。

ゲーム中の彼女の印象は、高慢で高飛車な令嬢だった。それと見た目による先入観から、私は彼女を意地悪なライバルだと勝手に決めつけていたのだ。

だが、実際の彼女は、自分の非を認めることができる真面目な人だった。

なんだよ、なんだよ、クリステイナ。素直な可愛い人じゃないか。ギャップ萌えしてしまうわ。一気に彼女の好感度がアップした。

なんだか嬉しくなった私は顔を上げ、脳裏に描いていた反撃の技をすべて消し去って口を開いた。「いえ、気になさらないでください。あれは私が勝手にすっ転んだだけです」

にっこりと微笑むと、クリステイナは弾かれたように驚きの表情を浮かべる。

「なにもない場所で転んだりするのは日常茶飯事で、両親にも鈍いと言われるのです。だからクリステイナ様が気に病む必要はないですわ」

ゲームでのアーネットは、おっとりとした清純派令嬢だったが、プレイしている側としては鈍くさいと思う面も多々あったので、そう告げた。

すると彼女はホッとしたみたいに胸を撫で下ろし、美しい顔に安堵の色を灯す。

「アーネット様、ありがとうございます」

そうか、彼女は謝罪をするつもりでお茶会に呼んでくれたんだ。だけど外野がワーワーうるさいから、こうやって二人になったのだろうな。薔薇のアーチを見ようというのは口実だと思う。だが、ここまで来たのなら、せつかくなので薔薇のアーチの美しさを堪能したい。

「クリステイナ様、薔薇のアーチはあちらかしら？」

香りの強い方を指さすと、クリステイナは頷きつつもまだなにか言いたげだ。だから私は、じつと彼女を見つめた。

宙に視線をさまよわせたクリステイナは、一度唇をきつく結び、口を開いた。

「アーネット様、もう一つ聞きたいことがあります」
視線に込められた力がさきほどより強くなったが、怯まず受け止める。クリスティーナは絞り出すような声を出した。

「ライザック様を、どう思っていますか」
「えっ!？」

予想外のことを聞かれ、思わず変な声が出た。
「どうって……」

先日、無断で私の部屋へズカズカ侵入してきた彼の姿が浮かぶ。あと、変な柄のスカーフが脳裏をよぎった。

どう思っていると聞かれても、率直に言っても思っていない。恋愛対象かと問われたのなら、答えはノーだ。彼は断じて私のタイプではない。たとえ顔がよく、家柄が申し分なくとも、生理的に受け付けない。

だが、それをそのまま口にするのは、ためらわれる。誰かに聞かれて不敬罪にでもなったら大変だ。それに彼は、目の前のクリスティーナの婚約者でもあるのだから、下手なことは言えない。

そのクリスティーナは真剣な表情で私をじっと見つめている。そう、返答を待っているのだ。きつと勇気を出して聞いたのだろう。

ならば私も、正直に答えるべきだと判断した。
たった一言でいい、『ないわ』と――

喉をぐくりと鳴らし、口を開く。

「ライザック様のことは――」

その時、なにやら騒がしいことに気づいた。

ハツとして周囲を見回していると、クリスティーナも気づいたようで眉をひそめた。

そして聞こえてきたのは、こちらに向かってくる足音。

続いてある人物が視界に入った私は、驚きに目を見開いた。

「アーネット!! よかった、無事だったんだね!!」

緑の垣根の奥から姿を現したのは、たった今、会話に出ていたライザック。

両手を広げ、私に向かってくる彼が見えた瞬間、ゲツ!! と思い、一歩後ずさった。

ライザックが纏っているのは空色の上着と黒いスボン。ここまではいい。だが問題はブラウスだった。彼は変な絵柄のブラウスを着用しているのだ。胸元に、豚とも猫とも判断のつかない動物がでかかど刺繍されている。

……ないわ。

金の髪に優しげな目元、新緑色の瞳。そんな爽やかな見た目を一発でぶち壊す柄のブラウスである。

言うなれば、ドン引きだ。

そもそも彼はなにをしに来たの？

側に寄ってきた彼が私を抱きしめようとしたが、すんでのところで回避した。

「ラ、ライザック様、いつたいどうなされたの？」
彼もお茶会に呼ばれていたのだろうか。

疑問に思いクリステイーナに視線を向けると、彼女は険しい顔をしてライザックをじっと見つめていた。この様子ではどうやら、呼んでいなかったようだ。

「君の屋敷を訪ねたら、クリステイーナのお茶会に行ったと聞き、心配になってかけつけたんだ。大丈夫？ 嫌がらせなどされていないかい？」

心配そうな眼差しを向けてくるライザックの言葉を聞き、目が点になった。
変に誤解されては困るので、急いで訂正する。

「いえ、ライザック様がなにを心配しているのかわかりませんが、ただ美しい薔薇のアーチを観賞しに来たのですわ」

するとライザックは、キッと鋭い視線をクリステイーナに向けた。

「君はアーネットに嫌がらせをするために呼んだのだろう!!」

はー!?

ちよつと待って待って待って!!

まず、人の話を聞きなさいよ!!

ライザックの大声が周囲に響いた。お茶会の場合にも届いてしまったのか、令嬢たちが何事かといった様子でわらわらと姿を現す。私たちは注目の的だ。

なんだろう、このシーン。

どこかで見た覚えがある。

そう思った瞬間、頭の霧が晴れて、ハッと気づいた。

これはゲームをプレイしていた時に見た、クリステイーナのいじめが糾弾されるシーンだわ。気づいたら、がっくりきた。

素敵なイベントが発生することを楽しみにしていたのに、現れたのはライザックかよー。

もしかしたら、クリステイーナと友人になれたかもしれないのに。

画面で見た時はそれなりに楽しんでたシーンだが、実際体験すると、嬉しくも楽しくもない。

だって、このライザック王子、ちっともタイプじゃない。そもそも人の話を聞かずに突っ走るなんて、最悪極まりない。

それに、仮にも婚約者であるクリステイーナを皆の前で糾弾してアーネットの手を取るところも嫌だし、自分に酔っている感もすごく嫌。なにより、ブラウスの柄が興ざめだ。

そこで私は、つい口を挟んでしまった。

「ライザック様、まずは落ち着いてください」

ライザックはハッとした次の瞬間、ギョツと私を抱きしめる。

「ああ、怖い思いをさせてすまなかったね。もう替えることはない」

ギャー!! はーなーせー!!

突然のことで思考が停止したけれど、ライザックのきつすぎる香水が鼻につき、すぐに我に返った。

なんとか腕の拘束から逃れようとするが、ライザックの力は弱まらない。それどころか、ぎゅうぎゅうと締め付けてくる。

「お、お放しくださいっ」

訴えてみるも、ライザックはやっぱり聞いてくれない。

この人、耳がついてないんじゃないの？

ライザックは私の両肩を強く掴んだ。そして視線を合わせて口を開く。

「大丈夫だ。僕はもう決意したから」

吹っ切れたような顔に、嫌な予感しかしない。

ライザックはクリステイーナと向き合い、宣言する。

「クリステイーナ、君がアーネットに数々の嫌がらせをしてきたことを知っている。僕はもう我慢ならない。よって、君との婚約を解消したい」

ギャー、コイツ、言っただなあ!! そもそも嫌がらせとか証拠もないでしょうが!

堂々とした声を聞き、私は顔をひきつらせた。

周囲の皆も、きちんと聞いたはずだ。

「わかりましたわ」

その時、冷たい声が響きわたる。

視線を向けると、クリステイーナが凍りついたような顔をしていた。口調は厳しく、表情に感情らしきものはうかがえない。

「ライザック様がそうお考えなら」

あっさり引きさがつたクリステイーナはその場で深くお辞儀をし、クルリと背を向けた。

そしてそのまま、庭園の奥へと歩いていった。

ちよつと待つてクリステイーナ、立ち止まって話を聞いて!!

それ以前に、私にこの人を押し付けないで!!

「ちよつ、待つ……」

慌てて追いかけようと走り出してすぐ、手首をガシツとつかまれた。

「どこに行くんだい、アーネット。僕はここにいるよ」

やりとげた感でいっぱい表情をしているライザックが憎たらしくなったのも、仕方がないことだと思っ。

横を向き舌打ちをしたくなったが、なんとか堪えた。

皆の前で糾弾されたクリステイーナは大丈夫なのだろうか。

平静を装っていただけで、きつと深く傷ついている。でもこの場では泣くに泣けず、今頃どこかで泣いているかもしれない。

さきほど、『あれ、クリステイーナってば、いい人かもしれない』なんてワクワクしていた矢先に、この展開は辛い。

仲良くなれるかと思っただのに。

彼女のこと、もっと知りたいと思っただのに……

ますます隣に立つ男が憎たらしくなってくる。

「どうしたの、アーネット」

不思議そうに首を傾げるライザックは、こっちの悪感情に気づいている気配もない。

私は深いため息をつき、握った手にギュッと力を込めて、口を開く。

「ライザック様、私、屋敷に帰りますね」

にっこり微笑んで告げると、ライザックは焦り出した。

「え、ちよつ、じゃあ僕も一緒に……」

「いえ、頭痛がするので一人で帰ります。さようなら」

相手の言葉^{さえ}を遮り、クルリと背中を見せる。このまま一緒にいるなんて冗談じゃない。帰って昼寝でもしていた方がましだわ。

私は振り返らずに芝生を踏みしめ、大股でずんずんと歩いた。

その後は、屋敷についできたがるライザックを適当にまいて、散々な思いを噛みしめながら一人帰路についた。

数日後。ベッドの中で目を覚ます。

真っ先に視界に入ってきたのは、見慣れてきた高い天井。

やはり、まだ夢から覚めていない。

ベッドから起き出し、鏡台をのぞき込んだところ、アーネット・フォルカーが鏡に映る。

なんだかなあ、もういい加減、大沢あかりに戻りたいかな。美少女生活だって何日も体験すれば、現実世界が恋しくなる。

私がそう思うようになった原因の一つが——そろそろ来るかもしれない。

暗い気持ちでいると案の定、部屋の扉がノックされた。そしてエミリーが顔を出す。

「おはようございます、アーネット様。本日も素敵な花束が届いていますわ」

エミリーは大きな花束を手に、満面の笑みを浮かべ入室してきた。

だが私は、げんなりしてしまふ。

「メッセージカードもついております」

エミリーから手渡されたメッセージカードに目を通す。

『君にどんな花を贈ればいいのか、僕は毎回頭を悩ませるよ。なぜなら君はどんな花よりも美しい、可憐な花だから』

うっ、ボエマー!!

メッセージを読んだだけで、誰からの贈り物なのか一発でわかってしまう自分が恨めしい。

こうやって毎日ライザックから花束が贈られてくるのだ。

今日はピンクのガーベラとかすみ草の組み合わせだった。とても可愛らしく仕上がっている花束のだけれど、毎回、返答に困る変なメッセージがついている。とはいえ、相手は王子なのできちんとお礼状を書かなくてはいけない。

ああ、だるいし、めんどくさい。正直、もうお腹いっぱいだ。

そんな私の胸中など知らないエミリーは、爽やかな笑顔で口を開く。

「あと、アーネット様に届いているお手紙です」

また、きたんかい。

アーネットは貴族の子息から手紙を受け取ることが多かった。それも、すべてにいちいち返信していたというから驚きだ。筆メメだな、アーネット。

手紙のほとんどが、アーネットの美しさを褒め称え、親しくなりたいという内容だった。いつてみればラブレターだ。現代日本のネット中心の生活に慣れ親しんだ私からするとかなり珍しかったけれど、この世界ではこれが普通だもんな。

ともあれアーネットは異性にもてる。

だからこそ、手紙が毎日何通も届いているのだ。面倒だしスルーしたいけれど、急に返事を書かなくなったら、私がアーネットじゃないって怪しまれるかもしれない。夢とはいえ、人に疑われたり糾弾されたりする展開は避けたい。

もう本当、いい加減、現実に戻りたいよ。

パソコンとコピー機があれば、定型文を印刷して配ったら終わりなのにさ。

「返事を書くのも疲れたわ」

手紙の束を見て思わず本音を漏らすと、エミリーは苦笑した。

「アーネット様は異性の懂れなんですわ。それこそ、今は婚約者がいらつしやいませんか、皆さん気を引きたくて必死なのでしょう」

「でもね、実は顔と名前が一致しない方もいるのよ」

「だからこそ、印象づけたいのですわ」

男性の気持ちを代弁するエミリーだけど、私は手紙の封を開けた途端、またもげんなりする。なぜなら、内容が内容だからだ。

『アーネット、君と親しくなりたいと、夜な夜な星に願っている。次の舞踏会ではぜひ一曲、ダンスをお相手していただけないだろうか？ それが叶うなら、僕は天にも昇ってしまうだろう』

このような内容を延々と読まされたら、天に昇って、そのまま星になっちゃえと思わずにはいられない。

なんでもこうもボエマーが多いかな。この世界の住人は。

顔を知らない人から受け取る熱い手紙なんて、正直言って恐怖だ。

現代ならストーカー扱いされても仕方がないと思う。

「アーネット様にご婚約なされば、お手紙は格段に減りますわ。陰で泣く男性が大勢いますけどね」

「だけど婚約なんて実感がわかないわ」

「旦那様はアーネット様に相応しいお相手をお考えだと思えます」

婚約とか結婚とか、正直めんどくさいよ。ああ、早く夢から覚めないかなと思いつつも、一通の手紙を手取る。それは他の手紙と違い、どこか古めかしい感じだった。

「これは……」

首を傾げつつ手に取ると、気づいたエミリーが声をかけてきた。

「それは教会からですわ」

「ああ、そうだったわね」

そうだ、思い出した。ゲーム中でもアーネットは教会へよく顔を出していた。そして教会にいる神父さま二人と定期的に連絡を取り合っていたんだっけ。

脳裏にぼんやりと浮かぶのは慈悲深いタナトス神父と、初老のマーロン神父の顔。タナトス神父は物腰柔らかく、落ち着いた雰囲気青年で、芯がとても強く、真面目なお方だ。二十代半ばだというのに年齢よりも大人びた、頼れる先輩的なキャラで、アーネットもだいたいふ心を許していた。

封を開け、中の手紙に目を通すと、挨拶から始まり、先日寄付をしたことへの礼が書かれていた。

「またいらしてください。教会の扉はいつでも開いています、か……」

口に出して読み終えた後、天を仰いだ。

この世界で暮らしていたアーネット・フォルカーが本来の私の姿とあまりにも違っていて、びっくりだわ。共通点がどこにもない。

エミリーがカーテンを開けると、部屋に光が入り込む。彼女は次にクローゼットへ行き、その扉を開けた。

「さあ、お着替えいたしましょう。本日のドレスは淡い水色などいかがでしょうか？ 涼しげな印象を与えつつ、可憐さも強調できますわ」

「……ありがとうございます。任せるわ」

あー、またドレスか。肩が凝るし、ウエストがきつい。

そもそもアーネットが持っているのは可愛い系のドレスが多いけれど、私の趣味とはちよつと違うんだよなあ。どちらかといえば、原色とかを使った派手なカクテルドレスが着てみたいかなあ。

「では、お着替えしましょう」

先日のクリスティーナの服装を思い出していた私は、エミリーの張り切った声を聞き、我に返る。私のために考えてドレスを選んでくれる彼女にはなにも言えずに、着替え終え、家族で朝食を取る部屋へ向かう。

「アーネット、以前も言ったが、いよいよ来週、ルネストーン国から使者がくる。城で食事が開催されるので、出席するように」

椅子に座ると父が朝の挨拶もそこそこに、来週の予定を告げた。

「この機会に、ドレスを新調するのでもいいだろう」

「ええ、ありがとうございます」

にっこりと微笑みながら答えたが、堅苦しい場なんだろうな。簡単に想像がつくわ。

それにクローゼットの中は既に満杯になっている。それこそ同じようなドレスで埋め尽くされているから、これ以上必要ない。

行きたくない〜!!

まあ、それまでには、この長い夢から覚めているだろう。たぶん。

というか、もうそろそろ覚めてくれないと、困るんですけど。私は、早く夢から覚めてくれと祈るばかりだった。

それから夢から覚める気配はなく、あつと言う間に翌週になり、食事会の日を迎えた。バタバタしながらも、準備をする。

今日の服装は薄い黄色の生地、白いレースがふんだんに使われているドレス。袖口に細かなレースがあしらわれている。

髪型はサイドだけ編み込みし、後ろでバレッタで止めた。準備はできたけど、気が重いわ。そもそも、私も会食の場に行く必要があるのかしら？ 父だけで十分ではなくて？ 疑問に思い、城に向かう馬車の中で父に聞いてみた。

「隣国の使者がいらつしやる場に、私が顔を出していいのでしょうか？」
すると父は嬉しそうに答える。

「ライザック殿下が、どうしてもアーネットにも出席して欲しいと仰せなのだ」
ゲツ、またその名前が出てきた。

うんざりしつつも返答する。
「……わかりました」

先日、ライザックは堂々とクリスティーナに婚約破棄を言い渡していたけれど、あれはライザックが勝手に言っただけで、婚約は無効になっていないはずだ。なのにアーネットを会食の場に呼ぶ

だなんて、バカなの？ いくらアーネットに夢中だからといって、これじゃあ、あんまりだわ。どこまでクリスティーナをこけにしたら気が済むのかしら？ 貴族同士の結婚は本人の意思だけじゃ、どうにもならないこともあると思うのに。

考え込んでいると、父が咳払いをした。ふっと顔を上げると父と目が合う。
「実は、話があるのだが、アーネット」

父が真剣な声色で切り出してきたが、なんだか嫌な予感がする。聞きたくないかもと思いつながらもうなずく。父は両手を組んだ上に顎を乗せ、じっと私を見つめている。ごくりと喉を鳴らしたのは、私だったのか父だったのか――

やがて、父が切り出した。

「ライザック殿下は今、クリスティーナ嬢との縁談を破談にしようとしていらつしやる」
ドクンと心臓が跳ねた。直後、心音が激しく鳴り響く。

「まだ公にはできないのだが、ライザック殿下はアーネットに婚約を申し込みたいそうだ」
それを聞いた時、心臓が止まるかと思った。そうきたか……!!

「しかし、婚約破棄をすぐというわけにはいかない。ある程度時間を置いてからと考えているが――」

「お父様、それって断れませんの？」

マナー違反だと理解しつつも、父の言葉を遮る。唇をギュッと噛みしめている私の顔を見た父は、そこでようやくと娘が嫌がっていることを察しようだ。

「もしやこの縁談に乗り気ではないのか？」

「はっきり申し上げますと、そうですわ」

「なぜ？ ライザック殿下とは親しげにしていたではないか」

父の声色は焦っている。

そりゃそうだよ。王家と繋がりを持つチャンスだもの。でもね、私は嫌なの。きっちり自己主張しておかないと大変なことになりそうだから言わせていただきます。

「率直に言いまして、ライザック殿下には魅力を感じません。人の話を聞かず、一方的に突き進むところが苦手です。それにクリステイナ様が、あまりにも可哀想ですわ」

ついでにあの趣味の悪い服も嫌。ナルシストなどころも受け付けない。いっそすべてが嫌だと口にした。だが私なりにオブラートに包んで伝えると、父は目を丸くした。

無理もない。深窓の令嬢と噂うわさされていたアーネットは、芯は強いがおっとりとして慈悲深く、いつも優しく微笑んでいる娘だった。決してグイグイ自己主張するタイプじゃない。

そんな娘がはつきりと拒否の言葉を口にしたことに、父はいささか衝撃を受けているようで、渋い顔をし、無言になった。場の空気がいたたまれない。これから隣国の使者をもてなさねばならないというのに、このムード。馬車の中はまるでお通夜のような。

こんな時、アーネットなら空気を讀んでうまく振舞っただろう。だがあいにく、私は自分の感情に素直なのだ。それに、どうしても譲れない部分はある。

ああ、早く、夢から目が覚めますように。ゲームはゲームとしてプレイするのが楽しいのだと、

切実に思った。

小高い丘の上に位置する城までは、レンガ造りの街道を進む。川にかかる橋を通り過ぎ、はるか前方に見えたのは港街ドナンだ。周囲を海に囲まれていることもあって、窓を開けると潮の香りがある。

波止場はとほにはいくつかの船が停留している。外を眺めると、真つ黒に日焼けした男たちの姿が見えた。航海から帰ってきた人々だろう。海の向こうの国はどんな生活なのかしら。いっそ、私も海に向こうの国へ行き、本来の自分の姿をさらけ出した嘘偽りいつはりのない暮らしを送るのもいいかもしれない。

港街ドナンを過ぎてしばらくすると、やがて首都にたどり着く。

そして、小高い丘の上に高い城壁が姿を現した。

古めかしいけれど、威厳ある雰囲気のある城である。城門にいた見張りの兵士が、通り過ぎる馬車に一礼した。城が近づくにつれ、気分が徐々に重くなる。なにしろ、私は行きたくもない食事会に出席させられ、好きでもない男と婚約させられるかもしれないのだ。

私、なにをやってるんだらう。夢ならもつといい展開になつて欲しい。

もう何度目かわからないが、早く夢が覚めることを祈りながら、そつと瞼まぶたを閉じた。

城につき馬車から降りると、ライザックの姿が見え、気分がさらに重くなった。

また、変な服を着ている……

ライザックは丈の短い上着を羽織はねおっていた。それも、裾が通常の半分しかない上着。その下のフリルが幾重いくえにも重なったブラウスが、上着の裾からはみ出している。

「使者が到着するまで、まだ時間がある。庭園を歩かないか？」

ライザックは上機嫌で声をかけてきた。父や他の貴族の目がある以上、ここで行きたくねえ、という雰囲気醸かみ出し出すわけにもいかず、苦笑いを浮かべたが、頬がひくつく。父からも視線うながで促され、渋々ながら庭園へ向かう。

庭園には薔薇ばらや色とりどりの花が咲き乱れていて、甘い香りが漂たってきた。だが私の心は沈むばかり。原因は隣を歩くライザックのせい。

「アーネット、ほらごらん。アーネットの美しさを鳥たちも称たえているみたいじゃないか」

ライザックが指さす方向では、鳥たちが自由に空を舞い、さえずっていた。ただ鳥が啼ないているだけだと思ふのだが、ポエマーライザックにかかれれば、なんでも詩になるらしい。

「ありがとうございます」

私は引きつった笑みを浮かべ、そう答えることしかできなかった。

だがライザックは私のことなどお構いなしに、会話を進める。

「アーネットは素敵色のドレスを着ているね」

「ありがとうございます」

「でも、もつと君の魅力を引き立てるデザインのドレスがあると思うんだ。そうだ、今度僕から贈

ろう」

やめろ。

とんでもない申し出に、表情が固はまってしまう。

まさか、ライザック本人が選ぶとか言わないわよね？

「僕の上着、素敵だろう」

自信満々に上着を見せびらかすライザックに、どう答えるのが正解なの。

「この上着は、お抱えの仕立て屋一押し作品さ。世界にこの一品しかないんだ」

そりゃ、そんな丈の短い変な上着、一着しかないわ。仕立て屋が生地をケチったのかと思った。

「僕たちが式を挙げる時は、この仕立て屋にデザインしてもらった衣装にしよう。流行の最先端をいく僕たちに、皆の視線が集まるだろう」

おっ、おい!! 勝手に話を進めるな。

それに私たちが式を挙げるなんて、ありえないから。皆の視線を集めるにしたって、それは好奇の視線だから!!

本当にダメ。ナルシストなところも、人の話を聞かないところも、すべて無理。

早く父のもとへ戻りたい。もう限界だわ。

なんとか口実を作ってドヤ顔のライザックと離れたい、このまま庭園を歩くななんて拷問くわんもんだと思ひながら重い足取りで進む。日差しが強く汗ばむ陽気だ。庭園の中央に大きな木が立っていたので、木陰で少し足を止めた。